

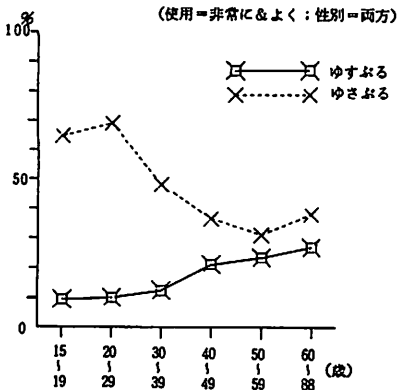
樽をゆさぶる・ゆすぶる

藤田 勝 良

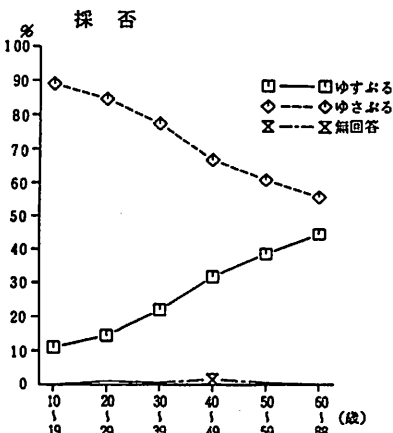
樽に手をかけてゆさゆさと揺り動かすときの動作を我々は「ゆさぶる」というであろうか。それとも「ゆすぶる」というであろうか。

まず、東京で1984年に行なった千人調査のこの文例での両語の使用に関しての結果をみてみよう。表1は、それぞれの語について「非常に良く使う」または「良く使う」と回答したものの割合を示したものである。これで見ると「ゆさぶる」が全年齢層にわたって優勢である。年齢層別にみると、老年層では二語の勢力が伯仲しているが、中年層から若年層にかけて「ゆさぶる」の勢力が急速に伸長していることがわかる。表2に示すように標準語形としての採否の意識もこれと平行した結果となっている。

〈表1〉



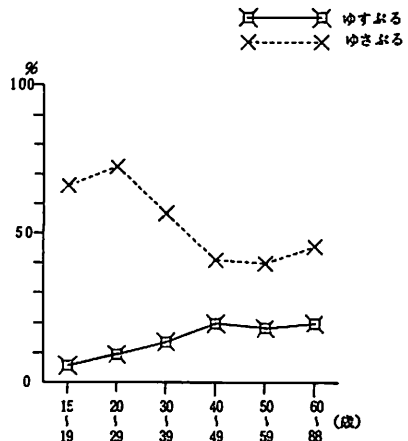
〈表2〉



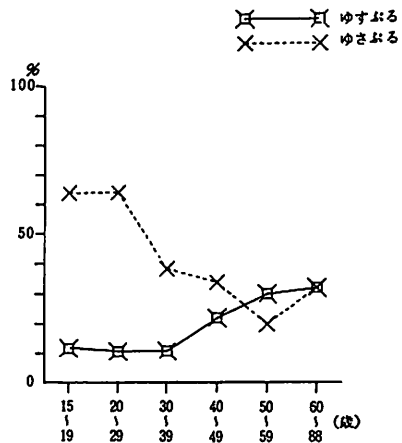
また、使用に関する調査結果を男女別にみると変化の傾向については相違がないものの、老年層での両語形の伯仲の様相は女性においてより顕著であることが注目される。(表3参照)。

〈表3〉

(使用=非常に&よく;性別=男)



(使用=非常に&よく;性別=女)



さて、翻って両語形についての辞書の記述はどうなっているであろうか。手許にある小型辞典の一つ『三省堂国語辞典第三版』をみると、次のように「ゆさぶ

る」を主とし、「ゆさぶる」を従として扱っている。

ゆさぶる〔揺さぶる〕(他五)

㊦力を加えて大きくゆれ動くようにする。

㊦相手を大いに動揺(ドウヨウ)させる。

㊦揺さぶり。㊦動揺さぶれる(下一)。

ゆすぶる〔揺すぶる〕(他五)

ゆさぶる。ゆする。㊦動揺さぶれる(下一)。㊦動揺さぶれる(自下一)。

『岩波広辞苑第三版』や『小学館国語大辞典』、『角川国語大辞典』もこれと同様に「ゆさぶる」を主とし、「ゆすぶる」を従としている。一方、放送用語についての基準を示した『NHK新用字用語辞典』では次のように両語を対等に扱っている。(同書P.491)

ゆさぶる 揺さぶる

ゆすぶる 揺すぶる

『岩波国語辞典第三版』では『三省堂国語辞典第三版』などとは逆に「ゆすぶる」を主とし、「ゆさぶる」を従として扱っている。次の通りである。

ゆさぶる 【揺さぶる】〔四他〕→ゆすぶる

ゆすぶる 【揺すぶる】〔四他〕しっかりと立っている物に力を加え、全体が揺れるようにする。

ゆさぶる。「木を——って実を落とす」「土台から——って到す」「心を——」

このように諸辞書の両語の主従についての扱いは様々であり、かならずしも統一されていないが、使用の実態を重視する立場にたてば、『三省堂国語辞典第三版』などの形が適当ということになるのか。

ただし、これはあくまでも両語間に意味差が存在しないという前提にたった場合であり、二語に意味的な相異を認めていると思われる『新明解国語辞典第三版』のような辞書もあるので注意を要する。この辞書では「ゆすぶる」は自分の内的な力か、外部の加力によるかを問わないのに対し、「ゆさぶる」は外部の力によって揺れるという意味差が認められているようである。次のとおりである。

ゆさぶる①(他五)外から力を加えて、大きく揺れるようにする。〔なんらかのショックを与えて、大きく揺れるようにする。〔なんらかのショックを与えて、相手の気持を動揺させる意にも用いられる。例、「心・(足もと・基盤・政局)を——」〕〕㊦ゆさぶり①「一をかける」㊦動揺さぶれる①(下一)ゆすぶる①(他五)大きく揺れるように動かす。「からだを——」

また、これとは別に『言葉に関する問答集』7(文化庁1981)は「ゆさぶる」の方が大きくゆすることであ

り、「ゆすぶる」の方はそれほど大きくないという感覚の違いを指摘している。

これらの指摘を内省による例文判定で検証してみると次のようになる。

- (1) ?太郎は 自分の体を ゆさぶってみた。
- (2) 太郎は 自分の体を ゆすぶってみた。
- (3) 火山の爆発は ふもとの大地を 大きく ゆさぶった。
- (4) ?火山の爆発は ふもとの大地を 大きく ゆすぶった。

いずれも内省による限り、そうした指摘の傾向は認められそうである。但しこれが一般的なものであるかどうか、世代的、位相的な偏りを併なうものであるのかという点については今後の検証に俟たなければならない。ただ、こうした傾向が一般的なものであるとすると千人調査に於ける「ゆさぶる」の伸長、「ゆすぶる」の退潮は何を示すのか改めて問題となる。即ち、調査の文脈では、『新明解国語辞典第三版』や『言葉に関する問答集』7の指摘するような二語の差異が存在しても、理論的には二語が共に用いられ得るわけであるから、使用率はむしろ老年層のように伯仲して当然であるわけだが、中若年層では「ゆさぶる」が圧倒的な勢いを得ている。これには二通りの解釈が可能であろう。

i) 「ゆさぶる」「ゆすぶる」の意味領域が明確に分かれる方向に向かいつつあり、「ゆすぶる」は自分の内的な力でゆれる場合のみ、あるいは非常にゆれの程度の小さな場合のみを意味するようになりつつある。

ii) 「ゆさぶる」が「ゆすぶる」との意味分担の傾向を解消し統合する方向で勢力を伸ばしている。

このi)ii)のうちのいずれが実相であるのか、これも今後検証を要する点である。

なお、二語を歴史的にみると文献上に早くあらわれるのは「ゆさぶる」で中世初期の『字鏡集』に「随ユサフル」、『名語記』に「物をゆるがすにゆさゆさとゆすぶる」などの記述がみえる。一方、「ゆすぶる」はやや下り、近世の俳諧集『寂砂子一下』に「物いへとゆすぶってみる桜哉(南湖)」として登場している。「ゆさぶる」も同様の俳諧集『文政句帖うつし一九年』に「汁鍋にゆさぶり落すぬか子哉」のように使われていることから、この時期あたりから二語はゆれ状態に入ったとみられる。明治初期の『言海』にも「ゆさぶる」を見出し項目とし、その説明の中で「ゆすぶる」を示す記述がみられ、また大正期の『大日本国語辞典』、昭和

初期の『大言海』では両語がともに見出し語として示されており、ゆれ状態は以降現代まで継続してきたとみられるが、少なくとも千人調査の文脈に於いては「ゆさぶる」の伸長と「ゆすぶる」の衰退という形でゆれ状態から解放されつつあるようにみえる。今後はこれが単純な二語併用の解消であるのか、それとも何らかの意味分担の傾向が芽生えていたのが上述した i) 又は ii) のような方向に動いたのかという意味的な観点を加えてその実相を追求していく必要がある。

参考文献

金田一春彦・池田弥三郎編1978 『学研国語大辞典』学習研究社
国広哲弥・中本正智他1984 『東京語のゆれ調査報告』国立国語研究所1981 『大都市の言語生活』三省堂

1983 『現代表記のゆれ』秀英出版
尚学図書編1982 『国語大辞典』小学館
新村出編1983 『広辞苑 第三版』岩波書店
武部良明1979 『日本語の表記』角川書店
1981 『日本語表記法の課題』三省堂
時枝誠記・吉田精一編1973 『角川国語大辞典』角川書店
西尾実他編1979 『岩波国語辞典 第三版』岩波書店
文化庁1975 『外国人のための漢字辞典』大蔵省印刷局
1975～84 『言葉に関する問答集 1～10』大蔵省印刷局
山田忠雄他編1981 『新明解国語辞典 第三版』三省堂
中本正智1985 『東京語のゆれについての考察』『人文学報』173号